

伝承遊びに関する研究（1）

～保育に活かすお手玉遊びとして～

青 野 光 子

A study on the Traditional Play (1)

～ as Beans Bag OTEDAMA make use of Childcare ～

Mitsuko Aono

1. はじめに

子どもの遊びは、身近な自然の中にあるものを使って、投げたり、蹴ったり、弾いたりして遊びの形態が出来上がり、簡単な動作の組み合わせや工夫によって遊びをつくりだしてきた。日本の昔より伝えられている伝承遊びは、明治・大正・昭和の時代には、盛んに行われ各家庭において母から娘へ、また祖母から孫へと伝えられたものである。しかし、現在では生活様式や核家族化の進行と共に、伝承される機会が少なくなっているのが現状である。子どもの遊びはデジタルゲーム機の登場により、ここ20～30年の間で大きく変わり、子どもの遊び場が屋外から室内へと移り、戸外での身体を使った遊びが減少したことによる子どもの体力・運動能力の低下の問題や、一人遊びが多くなったことによるコミュニケーション力の低下が指摘されて久しい。

平成20年中央教育審議会答申、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について」では、教育内容に関する主な改善事項において、教育基本法の改定を受けて、「伝統や文化に関する教育の充実」が挙げられている。幼児期の教育は、遊びを通しての学習であることを考えると伝統や文化に関する遊び、すなわち「伝承遊びの充実」をもっと図る必要がある。また、「幼稚園の内容」では、「幼稚園：発達や学びの連続性を確保するため…子どもや社会の変化に対応した幼稚園教育の充実を図る。」⁸⁾としている。子どもを取り巻く遊び環境の変化に対して伝承遊びは、子どもの発達過程において、手・指先を使った運動機能の発達や仲間とのコミュニケーション等の社会性、人間関係を育む力の育成等、今の子ども達が育ててほしい要素を多く持っている遊びである。よって、現在の子どもの育ちの状況を改善するためには、幼児期の教育機関である幼稚園、保育園等で伝承遊びがもう一度見直され、さらに実践されることを切に願うものである。しかし、現状は、幼児教育や義務教育に少しずつ採り入れられてきているが、まだ十分な状況とはいえない。

本研究では、伝承遊びの中でも「お手玉」を取り上げた。お手玉は、伝承遊びの中でもお手玉操作がやや難しいが、手・指先を多く使うことにより、幼児期に著しく発達をする脳・神経系への効果が期待でき、幼児期には是非とも経験させたい運動遊びと言える。手・指先を多く使うということは脳への刺激が著しく頭の良い子ども、器用な子どもへ成長することが期待される。また、お手玉は地方により歌

詞や運動方法が異なることや、運動技能のレベルもかなり高く、幼児教育の現場では十分に採り入れられていないのが現状である。そこで本研究では、お手玉遊びを保育の中で活かせるよう幼児の運動発達に応じた工夫やアレンジをし、集団で行う中で、段階的に技能が習得できるように運動方法に変化を付けた運動内容の提案を試みた。

2. 研究方法

本学、幼児教育学科1年生の表現（身体）指導法Ⅰにおいて、授業の中で実践を行い、幼児の発達にふさわしい伝承遊びとなるように、筆者が段階的指導法により、基本的な運動遊び（お手玉）として構成し学生に実践させた。また、授業最終日にアンケート調査を行い、学生の伝承遊びの実態と授業実践の効果について検証を行った。

3. 伝承遊び（お手玉）の歴史と効果

1) 伝承遊びとは？

伝承遊びとは、子どもの遊び集団の中から自然発生的に生まれ、子ども社会のつながりの中で人から人へと受け継がれてきた遊びである。伝承遊びの数々は、その基本となる形態があるが、地域により少しずつ遊び方が異なる。これは、遊びながら子供同士、あるいは年長者、大人が関わり伝えられる中でその地域にふさわしいもの、より楽しめるものとして変化してきたものだからである。

現代社会における子どもを取り巻く環境の変化は、子どもの遊び場の減少、異年齢集団による遊び体験の減少、家族の基本的機能の低下、地域コミュニティや人間関係の希薄化といった心身共に多くの課題をもたらしている。故に、幼児期に伝承遊びを体験することは、このような現代社会の課題を克服することにもつながり大きな効果が期待できる。

2) 伝承遊び（伝承玩具）を使った遊びの効果

伝承玩具を使った遊びとはお手玉、けん玉、竹馬、たこ、こま、などの伝承玩具を使った遊びのことで、用具を使いこなす（操作する）ことにより身体運動感覚を高め、地域の年長者や名人と呼ばれる人と世代を超えて関わることのできる遊びである。よって現代の核家族で育つ子どもにとっては、地域のいろいろな人たちと交流しコミュニケーションを図れる点において大きな意義がある。

また、これらの遊びは身体各部位を巧みに使うことにより成し遂げられる遊びであり、遊びの中で知らず知らずのうちに身体操作性能力やバランス感覚が鍛えられ、集中力や根気が培われる。

例えば、けん玉は、一見手先だけで操作しているように見えるが、実は膝のはずみを使った全身運動であることがわかる。また、お手玉も立って行くと手の操作だけで行うより、膝のはずみを使うことにより、リズムを全身で捉えやすくリズムカルな全身運動へと発展するリズム運動であることが実感できる。また、空間認知能力と時間認知能力（リズム）の調整能力が育まれるという身体操作性能力の発達が大きい期待できる大変優れた運動遊びといえる。

○ 伝承玩具を使った遊びの特徴

- ① 身近のもので作って遊ぶ（作り方・遊び方のコツの伝承：年長者から子どもへ）
- ② 身体運動感覚を高める（手・指先を使うことにより巧緻性、平衡性（バランス）
空間・時間（タイミング）・力動認知能力の向上）

③ 繰り返し遊ぶ（集中力、忍耐力、向上心）

3) お手玉の歴史

お手玉は、伝承遊びの中でも古い歴史があり、世界のお手玉は有史以前より動物の骨片で作ったお手玉遊びがあったといわれている。さらに古代ギリシャ神話に出てくるオリンポスの神々がお手玉を楽しんだという話もある。また、アジアでは、インドが発祥の地であり中国を経て日本には奈良時代に伝わり平安時代には宮中の遊びになり、「梁塵秘抄」の中に「石取り（いしなとり）」が記述され、平安時代に描かれた「年中行事絵巻」5月5日に流鏝馬見学に来た子ども達が石でお手玉をして遊ぶ様子が描かれているという。また、西行の歌にも「石子（いしなご）」と出ているということである。^{1) 6)}

お手玉の前身は「いしなご」「いしなとり」と呼ばれ、江戸時代に入り小石に変わりに木の実、貝殻を入れるようになり、日本のお手玉が本格的に作られるようになったのは、江戸時代末期より明治時代にかけてのことといわれている。明治以降になると小豆、木の実、小石等をいれ全国に広がり女の子の代表的な遊びの一種目となった。

4) お手玉の種類

- ① 俵（たわら）型…その名のとおり俵の形をしたお手玉
- ② かます型…巾着袋のようなお手玉
- ③ 枕（まくら）型…少し角ばったお手玉、昔の枕に似ている
- ④ ざぶとん型…4枚の布をはぎ合わせた座蒲団のような形のお手玉

5) お手玉と運動発達（運動感覚）

～お手玉（投げる・捕る）からリズム運動遊びへ

○ 「動き・リズム感」を育てるお手玉遊び

人間は、誕生してから約1年で、直立二足歩行を身につけ、様々な環境の中で体験を積み重ねる中で生活に必要な「動き」を身につけていく。特に1～6歳までの幼児期は脳・神経系の発達が著しくこの時期に適切な運動刺激を体験しないで成長すると動きがぎこちなく、様々な運動・スポーツをうまく行えず、運動が苦手・嫌いになる恐れがある。よって、この時期は、適切な運動刺激が最も必要な時期であるといえる。

運動神経・動きの良し悪しは、動きを身に付けるのに最適な時期に適切な体験をすることが必要であり、幼児期から学童期前半にかけては、多様な運動体験ができる環境の中で過ごすことが大切である。特に、お手玉遊びは、操作系の運動能力・運動感覚が育成される運動遊びであり、お手玉遊びに多く触れることにより、手先の器用な子どもに成長することが期待できる。また、繰り返し練習することで、集中力や忍耐力が培われ、リズムに乗ってお手玉を操作できるようになることにより、全身で運動リズムをとることができるようになる。幼児期に獲得されたリズム感は、その後のスポーツの運動リズム獲得により影響を及ぼすことが期待できる。したがって、幼児期には、お手玉遊びを友達と一緒に楽しむ中で大いに経験させたい運動遊びであり、その教育的効果は大きいと言える。

6) 集団でお手玉遊びを行う効果

幼稚園や保育園で伝承遊びを実践する際には、お手玉の特性を生かし、友達と一緒にすることにより遊び教材としての効果が一層高まると思われる。まず、お手玉は、個人技能の遊びという認識が一般的

であるが、園で行う場合は、まず、1個のお手玉が掌で握める心地よい感覚に触れ、お手玉に慣れ親しむ。次に簡単なお手玉遊びより導入し、みんなと一緒にお手玉遊びを楽しみつつ、少しずつ「できる」喜び・達成感を味わう中で、グループリズムを構成し連帯感や皆で行う楽しさを体験できるように工夫をしたい。また、先生は子ども達の良きお手本となれるよう自己の技能を高めておくことが大切である。（人的環境：憧れの的となる）集団で行うことにより以下の教育的効果が期待できる。

- ① 相手を思いやる心の育成（みんなで行うときは自分勝手をしない。相手がとりやすいように投げる・配慮する）
- ② 工夫し、考える力の育成（自分たちがもっと楽しめるように工夫する力の育成）
- ③ 連帯感、一体感が得られる（一緒に活動する楽しさ・喜び、グループリズムの形成により一体感が得られる）

7) お手玉遊びの教育的効果

お手玉遊びの実践により、総括すると以下の教育的効果が期待できる。

- ① 身体運動感覚を高める…幼児期は特に神経系の発育・発達の著しい時期であり、この時期に手（指先）腕を使い、目と手の協応動作を行うことにより全身の身体運動感覚（巧緻性、平衡性、敏捷性）を高めることができる。
- ② リズム感の養成…お手玉歌のリズムに合わせて動作を行うこと、皆で行うことによりリズム感の良い子に育つことが期待できる。
- ③ コミュニケーション力の育成…子ども同士で教え合うことや、相手と一緒に気持ちをあわせ行うことで思いやる心・連帯感が育つ。
- ④ 観察眼の育成…上手な子の技をよく観察することにより、コツを見抜く目が養われる。
- ⑤ 意欲的な子の育成…簡単な技から難しい技へ友達と一緒にい見せ合い、できたことにより、もっと上手になりたい（工夫し・考える）すなわち意欲的な子になる。
- ⑥ 集中力・忍耐力の育成…技能を高めるために繰り返し練習をすることにより、集中力と忍耐力が培われる。

4. 保育に生かすお手玉遊びの段階的指導法（実践例）

お手玉には、大きく2つの遊び方がある。一つは、ゆり玉「振り技」といい、片手または両手にお手玉を1～3個ずつ持ち、交互に投げ上げて遊ぶ方法（技）があり、もう一つは、よせ玉「拾い技」といい、お手玉5個を使い（親玉：1個、子玉：4個）親玉を動かす手を決めておき、お手玉歌にあわせ様々な技を行い遊ぶ方法がある。¹⁾

今回は保育に活かすお手玉遊びということで、前者のゆり玉遊びについて、まず1個のお手玉でお手玉の感触を楽しみ、お手玉に慣れる遊びから導入し、次に2個のお手玉の基本からバリエーションを広げて、幼児の運動発達を考慮し、幼児でも実践できる内容を考え、段階的に難易度が増し達成感が味わえるように動きの構成に配慮した。

<実践1> ○ 1つのお手玉：

(1) お手玉に慣れ・親しむ

- ① お手玉を握り、お手玉の感触（布・中身）を楽しみ、お手玉に慣れる。
右手・左手で交互に持ち、手の中にすっぽり納まるお手玉の感触を楽しむ。

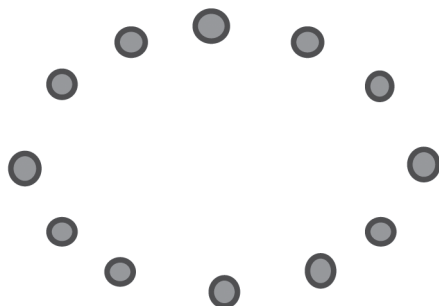
- ② お手玉をからだのいろいろな部位へ乗せる。（頭・肩・手のひら・手の甲・肘・膝・足の甲等）
- ③ 次に、お手玉をからだに部位に乗せたまま落とさないように歩く。
- ④ 次に、両手の中にお手玉を置き、軽く上へ投げ上げとる。これを繰り返す
- ⑤ 右手で軽く上へ10～20 c m真上に投げ右手でとる。（同様に左手でも行う）
- ⑥ 次に、右手から左手へ、近距離（20 c m）くらいで、左手から右手へアーチを描くように投げ渡しを行い、手から離れる感覚と掴む感覚に慣れる。
（投げ渡し＝おにぎりを握る感じ）
- ⑦ 右手のお手玉を下向きに握り、手を開くと同時に、落下するお手玉を落とさないようにキャッチする。（左手でも同様に行う）

(2) 歌のリズムに合わせる：1人で：「あんたがたどこさ」「げんこつ山のタヌキさん」の歌に合わせて、右手で1個のお手玉を真上に投げ右手でとる。次に左手で1個のお手玉を真上に投げ左手でとる。

(3) 1人で：左・右の手の投げ上げに慣れてきたら、次の段階として、「あんたがたどこさ」の「さ」の部分で右から左へ投げ上げ取る。さらに、次の「さ」で左手から右手へ投げ上げ取る。以上を繰り返し1曲分続ける。

(4) 8～12人のグループで：1重の円になり、隣と肩を並べて座る。

(図1)



両手・右周り（左周り）

- ① 「あんたがたどこさ」の歌にあわせて、両手で軽く投げ上げを行い「さ」で右隣へお手玉を渡す。（1曲）同様に左隣へお手玉を渡す。（1曲）

右手・右回り

- ① 最初に1個のお手玉を右手に持ち、右手へ軽く（10～20 c m位）投げ上げてとる。
- ② 同様に、左手でも行う（軽く投げ上げてとる）
→この運動を何回も繰り返し、お手玉に慣れる。（ウォーミング・アップ）
- ③ 「あんたがたどこ」…右手からスタートし右手・右手・右手…□
- ④ 「さ」で、右手でお手玉を持ち、隣の人へお手玉を渡す。…▲
- ⑤ 「肥後」…隣から来たお手玉を左手から右手へ投げ）…○
- ⑥ 「さ」…右手で隣の人のお手玉を渡す。…▲

- ⑦ 「肥後どこ」…○□
- ⑧ 「さ」…▲
- ⑨ 「熊本」…○□
- ⑩ 「さ」…▲
- ⑪ 「熊本どこ」…○□
- ⑫ 「さ」…▲
- ⑬ 「船場」…○
- ⑭ 「さ」…▲

以下、同様に「さ」で隣の人の左手へ渡していく。

- ⑮ 最後に「それを木の葉でちよいとかぶせ」…右手でお手玉を上からかぶせるように掴み取る。

左手・左回り

同様にやり方で、左手からスタートし、左手で、隣の人へお手玉を渡す。

以下同様に繰り返す。＜グループリズムの形成＞

＜実践2＞ ○ 2つのお手玉（2つゆり玉：振り技）：「げんこつ山のたぬきさん」1人で

- ① 右手、左手それぞれに1個ずつお手玉を持つ。
- ② 右手よりお手玉を10～20cm位投げ上げ、同じ手でとる。
- ③ 左手でも同様に行う。
- ④ 左右の手で同じようにキャッチできるように慣れるまで練習をする。
- ⑤ 両手で「2つゆり玉：2つ玉交換」を繰り返し練習し慣れる。

2つゆり玉：①両手に1個ずつ玉を持つ。 ②右手（利き手）の玉を高く投げ上げ、左手の玉を右手に渡す。 ③からになった左手で落ちてくる玉を受ける

2つゆり玉がリズムカルに出来るように、繰り返し練習する。

- ⑥ 「げんこつ山の」…右手お手玉、左手お手玉を交互に上へ投げ上げる。（4拍）
- ⑦ 「たぬきさん」…2つゆり：お手玉交換を行う（3拍+1拍休み）
- ⑧ 「おっばい飲んで」…⑥を繰り返す（4拍）
- ⑨ 「ねんねして」…⑦を繰り返す（3拍+1拍休み）
- ⑩ これを最後まで繰り返す。

＜実践3＞ ○ 2つのお手玉（2つゆり玉：振り技）：「あんたがたどこさ」

- ① 最初にお手玉を両手に1個ずつ持つ。
- ② 右手よりお手玉を上へ20～30cm位投げて同じ右手で取る。
同様に左手でも行う。（特に左手は（右利きの場合）利き手でないため、よく練習する必要がある、右と同じように投げられるようにする）
- ③ ②に慣れたら、両手で「2つゆり玉：2つお玉交換」を行う。（図2）
何回も練習をし「2つお玉交換」によく慣れる。

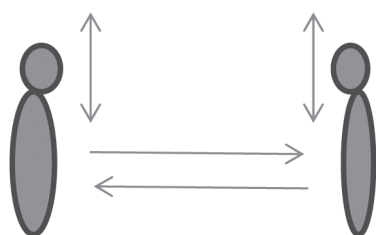
2人組で向き合って行う

「あんたがたどこさ」の歌にあわせて「2つお玉交換」を行い、「さ」で相手とお手玉を右手投げで交換し右手でとる。初めは、歌のテンポを「さ」の部分でゆっくり歌う。

同様に、これを1曲分行う。慣れてきたら、一定のテンポで出来るように行う。

<立って行う>ときは、膝のはずみを使い全身でリズムをとるとスムーズに行える。

（図2）2つお手玉交換



右手のお手玉を左手へ投げ上げたら、左手は持っているお手玉を右手へ送り（または右手で左のお手玉をとる）、落ちてくるお手玉をとる。（2つゆり玉：2つ玉交換）

5. 学生アンケートより（お手玉調査）

表現（身体）指導法Ⅰの授業の最後に、伝承遊び（お手玉）に関するアンケート調査を実施した。

（1学年：126人回答）

<結果と考察>

1. あなたは、子どもの頃にお手玉をやったことがありますか？
はい…101人（80%） いいえ…25人（20%）
2. あなたは、お手玉を誰から習いましたか？
祖母…74人（70%） 母親…19人（18%） 幼・保の先生5人（5%） 小学校4人（4%）
学童3人（3%）
3. あなたは、友達とお手玉をやったことがありますか？
はい…46人（37%） 何人：2人（19人） 3人（7人） 4人（5人） 5人以上（15人）
いいえ…80人（63%）
4. あなたは、以前お手玉を作ったことがありますか？
はい…10人（8%） いいえ…116人（92%）
（はい）の人で誰から作り方を習いましたか？…学校の先生、行事の講師
（いいえ）の人で誰から作り方を習いましたか？
祖母…40人 インターネット…36人 母親…19人 友達…2人 本…2人
5. お手玉づくりの感想は？（自由記述）
意外と簡単だった（38人） 難しかった（24人）
違う型のお手玉も作ってみたい（18人） 楽しかった（15人）
裁縫が苦手で大変でしたが出来あがったときは嬉しかった（7人）
自分で作って愛着が持てた（3人） 出来上がったとき達成感があった（3人）
中身が出ないようにする工夫は発見でした 小豆の量の調整が難しかった等。
6. なんという形のお手玉ですか？
俵型…79人（63%） 枕型…28人（22%） ざぶとん型…14人（11%） その他…5人（4%）
7. 家族や近隣に高齢者（祖父母）がいますか？
いる…103人（82%） いない…23人（18%）

8. 今回授業でお手玉を実践してみて、保育に活用してみたいと思いましたが？

- はい…118人（94%）理由：何より楽しい遊びだから経験させたい（34人）
 集中力が高まり、手先の器用さが身につくと思ったから（18人）
 日本の伝統遊びを伝えたい（14人）
 みんなで遊ぶ楽しさ、コミュニケーションがとれる（12人）
 出来ると達成感がある、出来たときの喜びがある（11人）
 リズム感が育つ（6人） 核家族が増え伝承遊びを伝えたい（4人）
 （以下）：狭いスペースでも遊べる 簡単に出来てよい
 心を落ち着かせる効果がある 子どもが夢中になれる
 今ではあまりしない遊びを経験してほしいから
 簡単な技から難しい技まであり意欲を刺激できそうと思った等、
 いいえ…8人（6%）理由：自分が上手くないから子どもに教える自身がない（5人）
 子どもに見せられるほど上手くない（2人） 下手だから（1人）

9. お手玉の授業の感想は？（自由記述）

- ・もっと上手になりたい（62人） 楽しかった。できるとうれしかった（35人）
- ・3個のお手玉も出来るようになりたい（22人）
- ・子どもに教えられるくらい上手になりたい（13人） 達成感があった（12人）
- ・もっと練習して子どもを驚かすくらい上達したい（8人）
- ・1人でなく2人、大勢でやる遊びが楽しかった（8人）
- ・いろいろな遊び方、バリエーションを知ることが出来た（3人）
- （以下）：お手玉大好き 下手でも楽しい 出来なくて悔しかった
- ・子どもに教えてあげられるきっかけの授業になり良かった
- ・懐かしかった お年寄りとの良いコミュニケーションになると思った
- ・片手2個が出来るようになったので違う技にも挑戦してみたい。
- ・保育現場で祖父母学級等のイベントで取り入れたらよいと思った。等

<考察>

お手玉について子どもの頃の実験を尋ねたが、本学幼児教育学科の8割の学生が、子どもの頃にお手玉経験があった。また、誰から習ったかでは、「祖母」が多く（7割）、核家族化が進む現代において、家族や近隣に高齢者がおり、祖母からの伝承がなされていること、また3世代が一緒に暮らす新潟県ならではの地域性が読みとれた。

次に友達とのお手玉経験を尋ねた結果では、経験がない学生のほうが多く（63%）、「はい」と答えていても、地域の友達とのお手玉遊びなのか、学校や行事等の設定された場面でのものか両方を含むと思われるので、学生より詳しく聞き取りたい項目である。

また、お手玉製作について、今回は何も情報を与えず学生の製作力と作り方を試した。今までお手玉を作った経験のない学生がほとんど（92%）であり、作り方を習った人は、祖母（40人）が多く、次にインターネット（36人）、母親（19人）の順になっている。祖母に次いで現代っ子は、やはりインターネットの活用が身近であることが裏づけられた。さらに、手作りをしたことにより、「難しく苦勞をしたが、良い経験になった、愛着が持てた、もっと違う形を作りたい」等、ほとんどの学生に前向きで意欲的な意見が多く、がんばって作り上げた達成感を読みとることができた。

次にお手玉遊びを保育の現場に活用したいか尋ねたところ、126人中118人(94%)が活用したいと答えており、お手玉遊びの効果と楽しさを共有する中で保育に活かせる自信を得たと見てよい回答となっている。よって今回の授業実践は保育現場へお手玉を活用するための動機づけを与えることができたと言える。また「いいえ」と答えた8人については、子どもの頃にお手玉の経験がない学生が半数の4名おり「教える程自分の技能に自信がない」「下手だから」という回答であった。しかし授業の感想では、「子どものお手本になれるよう練習して上手になりたい(7名)」等の意欲的な意見と「できないのがつらかった(1名)」があり、やはり子供の頃のお手玉遊びの経験の差が大きいと思われる。

最後に、授業の感想を求めたが、ほとんどの学生は「もっと上手になりたい」「子どもに教えられるように上達したい」等、技能向上を求めており、少しでも「できた達成感」により次への意欲・向上心が現れていた。さらに皆で行うお手玉遊びの楽しさを挙げていた。しかし1名が自分の技能に不満足・あきらめの回答で、援助の必要性を感じた。また、家族の祖母等に上達のコツを習うことにより、年長者とのコミュニケーションの良さを実感した学生もおり、伝承遊びのよき体験になった様子が伺えた。

6. まとめ

伝承遊び・お手玉は、日本古来より受け継がれてきた子どもの遊びであり、日本の伝統的な遊び文化として、幼児期より慣れ親しむことの意義は大きい。本研究では、保育者をめざす幼児教育学科の1年生に表現(身体)指導法Ⅰの授業において、保育に活かすお手玉遊びとして実践しアンケート調査を行った結果、以下の知見が得られた。

1. お手玉は、一般的に個人技能として難易度も高く、保育の現場では遊びとして採り入れにくいという認識があるが、本研究では、“集団でお手玉を楽しむ”ことをテーマに、幼児期の発達を考慮し、お手玉に慣れる1つのお手玉遊びから段階的に、2つのお手玉遊びとして運動内容を構成した。その結果、学生は、お手玉遊びを楽しみ運動遊びのバリエーションを増やす中、「保育に活用したい」さらに「保育者としてお手玉技能をさらに高めたい」という意欲的な姿勢がみられた。
2. 集団で行う伝承遊び・お手玉の教育的効果は、以下の点が挙げられる。
 - ① 身体運動感覚を高める
 - ② リズム感の養成
 - ③ コミュニケーション力の育成
 - ④ 観察眼が育つ
 - ⑤ 意欲的な子に育つ
 - ⑥ 集中力・忍耐力が育つ

<引用・参考文献>

- 1) 日本のお手玉の会：大西伝一郎「お手玉」文溪堂 P.28 (2010)
- 2) 小川清美「子どもに伝えたい伝承遊び」萌文書林 (2006)
- 3) 小林芳文「子どものためのムーブメント教育」大修館書店 (1993)
- 4) 芸術教育研究所編 「伝承遊び事典」黎明書房 (1985)
- 5) 田中邦子「お手玉・まりつき・ゴムとび」一声堂 (2009)
- 6) 西村誠、山口孝治、柘岡義明「伝承遊びアラカルト」昭和堂 p.3 (2009)
- 7) 丸山美和子「リズム運動と子どもの発達」かもがわ出版 (2007)
- 8) 文部科学省ホームページ「幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領改定のポイント」<http://www.mext.go.jp/component/a-menu/education/> (2008)